

けものフレンズ—After stories—

鍵宮富雄(GIGANT GIGS)

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

初のけものフレンズ2次小説。

目次

1.	弱点	1
2.	お花見	25
3.	ずっと一緒	32
4.	嘘つき	40
5.	レズ	51

1. 弱点

サーバル「ねーねーかばんちゃん、これからおひるねしようよ！」
かばん「おひるね？」

サーバル「うん！」

かばん「いいよ。でも、どこでするの？」

サーバル「私のおきにいりのぼしよ！このちかくにあるんだー。今日は天気もいいし、きつとすぐくきもちいいよ！」

かばん「お気に入りの場所かー……いいね、ぼくも行きたい！」

サーバル「やったー！じゃあ私が案内してあげるね。ついてきて
！」

かばん「うん！」

~~~~~

—30分後—

ガサガサ：

かばん「サ、サーバルちゃん……まだ着かないの？」

サーバル「大丈夫！もうすぐだから！がんばって！」

ガサガサ：

サーバル「あ、ほら！見えてきたよ！」

サアア……

かばん「わぁ……!」

サーバル「どう?すごいでしょ!」

かばん「うん!広くて、風がすごく気持ちいいね!」

サーバル「でしょー!ここは「草原ちほー」って言うんだ!」

かばん「草原ちほーかぁ……」

サーバル「天気がいい日はこうやって……みゃー!」ピョンツ

ドサツ

サーバル「ねっころがつておひるねするのがオススメだよ」ゴロ

ゴロ

サーバル「ほら、かばんちゃんも!」

かばん「う、うん。……えいっ!」ピョンツ

ドサツ

かばん「……」

サアア……

かばん「きもちいい……」

サーバル「きもちいいねー」

かばん「サーバルちゃんはいつもここでおひるねしてるの?」

サーバル「ううん。ここはサバンナちほーからは遠いから、たまにしか来れないんだ」

かばん「そうなんだ」

サーバル「この前おひるねしたときは、気づいたら夕方になっちゃってたなー」

かぼん「あはは。サーバルちゃんらしいね」

サアア……

サーバル「なんだかこうしていると、空をとんでるみたいだね……」

かぼん「うん。このまま吸い込まれちゃいそうな、不思議な感じ……」

サーバル「トリのフレンズはみんなこんな気持ちなのかなー」

サーバル「あっ」

かぼん「どうしたの？」

サーバル「あの雲、ちよつとかぼんちゃんに似てるかも！」

かぼん「え、どれどれ？」

サーバル「ほら、あそこの……」

かぼん「えー。似てないよ」

サーバル「似てるよ！」

かぼん「どつちかと言えば、あれはサーバルちゃんに似てると思うな」

サーバル「そうかなー？」

かぼん「あの上に2つぴよんぴよんって出てるのがサーバルちゃんの耳で……」

サーバル「ちがうよ。あれはかぼんちゃんのぼうしのはね！」

かぼん「いや、あれは耳だよ」

サーバル「はねだもん！」

かぼん「耳！」

サーバル「はね！」

かぼん「むむむ……」

サーバル「ぐぬぬ〜……」

2人「……」

2人「ぷっ」

2人「あははははっ!」

かばん「どっちでもいいね」

サーバル「どっちでもいいや」

サーバル「それにしても、雲っているんな形してるよね〜……なん  
でだろ?」

かばん「うーん……きつと、軽くてふわふわだからじゃない?」

サーバル「ふわふわ……いいなー、さわってみたい!」

かばん「ぼくもさわってみたいなー」

サーバル「ねー。トリのレンズならさわれるのかな」

かばん「どうかな。すごく高いところにあるから、もしかしたら届  
かないかも」

サーバル「そっかー……」

かばん「でも、いつかさわってみたいね」

サーバル「うん! そうだね!」

サーバル「……あつ、あそこの雲、ジャパリまんみたい!」

かばん「えっ? ……あ、本当だ。たしかに丸くてジャパリまんみた  
いな……」

かばん「……ってそれじゃあ、丸い雲はぜんぶジャパリまんになっ  
ちやうよ!」

サーバル「えへへ、そうかも」

かばん「あんなにいっぱいジャパリまんがあつたら、食べきれない  
ね」

サーバル「私なら食べられるよ！」

かばん「えー、ほんと？」

サーバル「うん！私、1度に10このジャパリまんを食べたこともあるんだから！」

かばん「すごいなー。ぼくは3こでお腹いっぱいになっちゃおうよ」

サーバル「えっへん！」

かばん「でもサーバルちゃん、あのジャパリまんは、10こよりもっとたくさんありそうだよ？」

サーバル「ええっ！そんなに!？」

かばん「うん。たぶん、30こくらいあると思うな」

サーバル「うう、30こもかー……」

かばん「いや、40こかも」

サーバル「もー！結局いくつなの？」

かばん「いくつだろうね。数えてみる？」

サーバル「うん！やってみよう！」

2人「いーち、にーい、さーん、しー……」

・  
・  
・  
・  
・  
・

かばん「さんじゅはち……さんじゅきゅー……よんじゅうー！」

かばん「ちようど40こかー……サーバルちゃんはいくつになった？」



かばん「……あつ」

サーバル「すー……すー……」

かばん「……寝ちやつたんだ」

サーバル「……」スースー

かばん「……」

サーバル「……」スースー

かばん「……」

かばん（きもちよさそうに寝てるなあ）

かばん「……」

サーバル「……」

サーバル「……」ピョコッ

かばん「……ふふっ」

かばん（耳がぴよこんってした……かわいい）

かばん「……」

サーバル「……」

かぼん(そういえば、サーバルちゃんの耳ってけっこう大きいよね)

かぼん「……」ジーツ

サーバル「……」

かぼん(それに毛が生えてて、ふわふわしてそうで……)

かぼん「……」

かぼん「……」ソーツ…

サーバル「ううん……」

かぼん「！」ビクツ

サーバル「……」

かぼん「……」ドキドキ

かぼん(や、やっぱりダメだよね。起こしちゃうかもしれないし……)

かぼん(……でも)

かぼん「……」ジーツ

サーバル「……」ピョコピョコ

かぼん「……」

かばん（すぐくさわってみたい……！）

かばん「……」ウズウズ

サーバル「……」

かばん（ちよ、ちよつとだけなら……いいよね？）

かばん「……」

サーバル「……」

かばん「……」ソーツ…

かばん「……」チヨンツ

サーバル「……」ピヨコン

かばん「！」

サーバル「……」

かばん「……」プルプル

サーバル「……」

かばん「……」サワツ

サーバル「……」

かばん「……………」サワサワ

サーバル「ん……………」

かばん（ああああっ……………）

かばん「……………」ナデナデ

サーバル「……………」

かばん（すごい……………思ってたよりもかたいけど、でも毛がさわさわしてて……………）

かばん「……………」サワサワ

サーバル「……………」

かばん（なんだか、くせになっちゃいそう……………）

かばん「……………」スリスリ

サーバル「……………」

かばん「……………」ツンツン

サーバル「……………」ピョコッ

かばん「ふふふ……………」

サーバル「ん……………」

かばん「…………♪」ナデナデ

サーバル「…………」

かばん「…………♪」サワサワ

サーバル「…………」

サーバル「…………かばんちゃん、なにしてるの?」

かばん「!!」ドキッ

サーバル「…………」

かばん「あつ!えつと、その…………!」アセアセ

サーバル「…………」

かばん「ご、ごめんねサーバルちゃん…………起こしちゃった?」

サーバル「…………ううん。だいじょーぶ」

かばん「そっか…………」

サーバル「…………でも、なにしてたの?」

かばん「その、ちよつとサーバルちゃんの耳をさわってみたくなっ

ちやつて…………」

サーバル「耳?」

かばん「うん。ほら、サーバルちゃんの耳って大きくて、ぴよこぴよこしてるでしょ?だから…………」

サーバル「…………」

かばん「…………ごめんね。いや、だった?」

サーバル「…………」

サーバル「…………いいよ。さわっても」

かぼん「えっ？」

サーバル「……」

かぼん「……いいの？」

サーバル「うん。ちよつとだけなら、へーき」

かぼん「……」

サーバル「あ、でも、引っぱったりしちやダメだよ？」

かぼん「うん」

サーバル「……」

かぼん「……それじゃあ、失礼します」

かぼん「……」サワッ

サーバル「んっ……」

かぼん「……」サワサワ

サーバル「……」

かぼん「痛くない？」

サーバル「うん」

かぼん「……」ナデナデ

サーバル「……」

かぼん「……♪」スリスリ

サーバル「……」

かぼん「……」サワ…

かばん「……」カリッ

サーバル「ふみやあつ!!」ゾクゾクッ

かばん「!?!」ビクッ

サーバル「うみやああ……」

かばん「えっ、ご、ごめん！痛かった!?!」

サーバル「うう……」

かばん「あわわ……どうしよう、サーバルちゃんが……!」

サーバル「まって……ち、ちがうの」

かばん「え？」

サーバル「み、耳のうしろは……その、弱くて……」

かばん「……」

サーバル「うー……」

かばん「……もしかして、くすぐったかったとか？」

サーバル「……」コクッ

かばん「そうなんだ……」

サーバル「……」

かばん「……」

かばん「……」サワッ

サーバル「……っ」ビクッ

かばん「……」ナデナデ

サーバル「……」

かばん「……」スリスリ

サーバル「ん……」

かばん「……」サワ……

かぼん「……」カリッ

サーバル「みやあああんっ!!!」ゾクゾクッ

サーバル「かぼんちゃん!!」

かぼん「ご、ごめん。つい……」

サーバル「もー!おこるよ!」

かぼん「ごめんねサーバルちゃん。もうしないから……」

サーバル「だーめ!そんなことするなら、もう耳はさわらせてあげないんだから!」

かぼん「ええっ!」

サーバル「ふーんだ!」クルッ

かぼん「そ、そんなあ……」

サーバル「……」

かぼん「うう……」シユン

サーバル「……」

かぼん「サーバルちゃん……」

サーバル「……」

サーバル「……」フリフリ

かぼん「!」

かぼん(こ、これは……)

かぼん「……」



サーバル「……………」フリフリ

かばん「……………」ソーツ…

かばん「……………」モフツ

サーバル「みゃっ!?」ビクツ

かばん「……………」

サーバル「か、かばん、ちゃん……………」プルプル

かばん「……………」

かばん「……………」モフモフ

サーバル「……………」っ!

かばん「……………」モフモフ

サーバル「んんっ……………」

かばん「……………」モフモフ

サーバル「……………」

かばん「……………」モフモフモフモフモフモフモフ

サーバル「うみやああああっ!!」バシツ!

かばん「いたっ!」

サーバル「……………」

かばん「……………」サ、サーバルちゃん?」

サーバル「……………」

かばん「……………」スツ

サーバル「……………」サツ

かぼん「……………」

かぼん「……………」スツ

サーバル「……………」サツ

かぼん「……………」

サーバル「……………」

かぼん「……………」スツスツスツスツスツスツ

サーバル「……………」サツサツサツサツサツサツ

かぼん「……………」スツ

サーバル「……………」バシツ!

かぼん「いたっ!」

かぼん「もー!にげないでよ!」

サーバル「にげるよ!」

かぼん「せっかくモフモフできもちよかったのに……………」

サーバル「だからって、激しくさわりすぎだよー!」

かぼん「えー……………」

サーバル「しっぽは大事なところなんだから、もっとやさしくしな  
きやダメ!」

かぼん「……………」じゃあ、やさしくならさわってもいい?」

サーバル「え?」

かぼん「お願い!あと一回だけでいいから!」

サーバル「えー……………」

かばん「……」ジーツ

サーバル「うう……」

かばん「……」

サーバル「……」

サーバル「……しよーがないなー」

かばん「ー」パアア

サーバル「ちゃんとやさしくしてよー?」

かばん「うん!うん!」コクコク

サーバル「あ、あと、しっぽのつけ根はさわちやダメだからね!」

かばん「分かった!」ウキウキ

サーバル「ほんとかなー……」

かばん「えへへー」ソーツ

かばん「……」モフツ

サーバル「……」

かばん「……♪」モフモフ

サーバル「……」

かばん「……♪」モミモミ

サーバル「みゃ……」ピクツ

かばん「……♪」サワサワ

サーバル「……」

かばん「……」ナデナデ

サーバル「ん……」

かばん「……」

かばん「……」ススツ……

サーバル「!?」

かばん「……♪」サワサワ……

サーバル「やつ、そ、そっちは……!」ビクビク

かばん「……」モミモミ……

かばん「……」モミ……

かばん「……」キュツ

サーバル「うみやあつ!」ビクツ!

かばん「……♪」モミモミ

サーバル「ふみやつ、あつあつあつ……!」ゾクゾクツ

かばん「……♪」フニフニ

サーバル「ふあああつ……か、かばんちや……!」ビクビクツ

かばん「……♪」サワサワ

サーバル「ん……ふつ……んううう……!」プルプル

かばん「……」モミモミ……

かばん「……」カリッ

サーバル「ふみやあああああつ!!!」ガバツ!

かばん「うわっ!」

サーバル「はあ……はあ……」

かばん「……」

かばん(さ、流石にやりすぎちやったかな……)

サーバル「……」

サーバル「……っ!」キツ!

かばん「ひっ!」

サーバル「かーばーんーちやーん……?」ゴゴゴゴゴ……

かばん「あわわわ……ご、ごめんなさい……!」ガタガタ

サーバル「私、もうおこったからね……」ゴゴゴゴゴ……

かばん「ごめんなさい……食べないで……!」

サーバル「言うこときかない悪いかばんちゃんは……」

かばん「ひい……」ビクビク

サーバル「こうだー!!!」ガバツ

かばん「うわああああ!!」

コチヨコチヨ…

かばん「……えっ?」

サーバル「うりやうりやー!」コチヨコチヨ

かばん「ちよっ、サーバルちゃん!」

サーバル「このっ!このー!」コチヨコチヨ

かばん「んふっ、んふふっ……! や、やめて……」

サーバル「やめないよーだ!」コチヨコチヨ

かばん「あははっ! だめ……脇の下は……!」

サーバル「ここかー!」コチヨコチヨコチヨコチヨ

かばん「あははははははっ!!!」

サーバル「どうだー!まいったかー!」コチヨコチヨ

かばん「あははははははっ!まいった!まいったからあ!!」

サーバル「まだまだー!!」コチヨコチヨ

かばん「やめっ、もうやめへえっ!!」

サーバル「うみやみやみやみやみやみやみやー!!」コチヨコチヨ

かばん「あーっ!あははははははっ!!」

---

かばん「……」ゼエゼエ

サーバル「もうあんなことしちやダメだからね!」

かばん「は、はひ……ごめんなさい……」

~~~~~

—ゆうえんち—

かばん「……ということがあったんです」

アライグマ「……」

フェネック「……」

かばん「あれからしばらくは耳もしっぽもさわらせて貰えなかった
んですけど……最近また、ちよつとだけさわらせてくれるようになった
たんですよ！」

アライグマ「……」

フェネック「……」

かばん「久しぶりのしっぽはとってもやわらかくてモフモフで、最
高だったなあ……」ウツトリ

アライグマ「……」

フェネック「……」

かばん「……って2人とも、なんでそんな変な顔をしてるんですか
？」

フェネック「やー……なんというか……」

アライグマ「……ごちそうさま、って感じなのだ」

かばん「？」

フェネック「それよりも、サーバルさんにそんな弱点があつたなん
て意外だねー」

アライグマ「確かに、びっくりなのだ！」

かばん「フェネックさんも、耳とかしっぽが弱かったりするんです
か？」

フェネック「さーどうだろうねー」

かぼん「……その、ちよつとさわってみたりしても」

アライグマ「ダメなのだ！フェネックに変なことをするのは、いくらかぼんさんでも許せないのだ！」

かぼん「ええっ!?へ、変なことって……」

アライグマ「フェネックのしっぽをさわれるのは、アライさんだけの特権なのだー！」

フェネック「あははー……そういうわけだから、ごめんねー」

かぼん「うう……分かりました」シユン

アライグマ「かぼんさんは、サーバルのしっぽをさわってればいいと思うのだ！」

フェネック「そうだねー……あ、噂をすればー」

かぼん「ええ？」

サーバル「……」

かぼん「あつ、サーバルちゃん」

サーバル「……」

かぼん「……サーバルちゃん？どうしたの？」

サーバル「……」

サーバル「……かぼんちゃんは、耳としっぽがついてれば誰でもいいんだ？」

かぼん「ええ？」

サーバル「……」ムスーッ

かぼん「え、いや、その……さっきのはそういうつもりじゃ……」

サーバル「……」

かばん「ただちよつと、さわってみたいなーって思っただけで……」

サーバル「そっかー……それなら、もう私のをさわらせてあげるの
はやめようかなー」

かばん「ええっ!?そんなあ!」

サーバル「ふーんだ。かばんちゃんなんかしらなーい」プイッ

かばん「ご、ごめんなさいサーバルちゃん!もうしないから……!」

サーバル「しらないもーん」

かばん「あうう……」

サーバル「……」

かばん「サ、サーバルちゃん……」

サーバル「……」

かばん「うう……」

サーバル「……」

サーバル「……」チラツ

かばん「……」シユン…

サーバル「……」

サーバル「……もー、しよーがないなー」

かばん「！」

サーバル「今回だけ、とくべつにゆるしてあげる！」

かばん「本当!？」

サーバル「うん。だから、そんなにしょんぼりしないで？」

かばん「わーいつ！ありがとー！」ギョツ

サーバル「うみやっ!？」ビクツ

かばん「えへへー♪」モフモフ

サーバル「もー！急にさわったらびっくりするじゃない！」

フェネック「ははー……やっぱりねー」

アライグマ「フェネック？何がやっぱりなのだ？」

フェネック「サーバルさんが本当に弱いのはー、耳やしつぽじゃな
かったってことだよー」

アライグマ「えっ？じゃあ、どこが一番弱いのだ？」

フェネック「さーどこだろうねー？」

アライグマ「ええっ！教えてほしいのだ！気になるのだー！」

フェネック「まーまー……見ればわかると思っただけだなー」

アライグマ「わかんないのだ！教えてなのだ！」

フェネック「しよーがないなー。いーい？サーバルさんが弱い
はー……」

かばん「……♪」モフモフ

サーバル「……かばんちゃん、そんなに私の耳やしつぽがすきな
？」

かばん「うん！だいすきだよー」ナデナデ
サーバル「そっかー……」

サーバル「……えへへー♪」
かばん「あれ？サーバルちゃん、なんだか嬉しそう？」
サーバル「ううん、なんでもないよー！」
かばん「？」
サーバル「……♪」

n e x t .

2. お花見

かぼん「それじゃあ、ボクたちはこれで」

サーバル「みんな、またねーっ」

かぼん「……ふう」

サーバル「かぼんちゃん、お疲れさま」

かぼん「あはは、ありがとう」

サーバル「最近あちこちから声がかかっちゃってるね」

かぼん「だねえ……」

サーバル「きつとみんな、かぼんちゃんを頼りにしてるんだよ」

かぼん「そうかな」

サーバル「そうだよ。絶対」

かぼん「何だかサーバルちゃん、嬉しそうだね」

サーバル「え、そ、そう？」

かぼん「ボクにはそう見えたかな」

サーバル「う、うーん。多分、なんだけど……」

サーバル「フレンズのみんなに、かぼんちゃんが頼られてることが嬉しいんだ」

かぼん「それはボクも嬉しいけど、でもどうしてサーバルちゃんも？」

サーバル「え、えと、その……」

かぼん「？」

サーバル「……私の大事な人がみんなの力になってるから、かな」

かぼん「そうなんだ……。ありがとう、サーバルちゃん」

サーバル「……き、今日はこれで全部終わったし、帰ろっか」

かぼん「うん。……あ、ちよつと待って」

サーバル「えっ？まだ何かあったっけ？」

かぼん「今日はもう帰るだけだし、その前にお花見していかない？」

サーバル「おはなみ、つて？」

かぼん「ええと、綺麗に咲いたお花をみんなで見たいの」

サーバル「へえー。やっぱりかばんちゃん、物知りだね」

かばん「時間があれば図書館で本ばかり読んでるからかな」

かばん「……それで、さつき聞いたんだけどこの近くにいい場所があるんだって」

かばん「サーバルちゃんさえよければ、これから行ってみない……？」

サーバル「もちろん行くよ！かばんちゃんと一緒だもん」

かばん「じゃあ、行ってみよう。ラッキーさん、お願いします」

ボス「ワカツタヨ、任せテ」

ボス「着イタヨ。話シテイタノハ、ココノコトダネ」

かばん「うわあー……」

サーバル「すつ、ごーい……！すごい、すごいねっ！」

かばん「うん……。辺り一面ピンク色で……」

サーバル「私、こんな色した葉っぱの木って初めてみたよ……」

かばん「これは葉っぱじゃなくて、お花が咲いてるんだ。だからこの色は、お花の色」

サーバル「このピンクは全部お花の色なんだ……」

かばん「でも、どうしてここだけに集まっているのかな」

ボス「コノ辺リハ、フレンズト一緒ニ花見ヲ楽シメルヨウニシテアルヨ」

ボス「セツカクダカラ、サーバルト一緒ニ散策シテミタラドウカナ？」

かばん「え、いいんですか？」

ボス「ソノタメノエリアダカラネ。ボクハ、ココデ待ツテルヨ」

かばん「ありがとうございます。サーバルちゃん、行ってみよう」

サーバル「うんっ」

かばん「わあ……。すごいね、サーバルちゃん」

サーバル「うん……。どこを見てもピンク色のお花が咲いて、それがいくつも重なって……」

サーバル「何だかその中に私たちが埋まっちゃったみたいだね」

かばん「この中にだったら、埋まってみてもいいかも」

サーバル「ええー？例えばの話でほんとに埋まるのはちょっとなあ」

かばん「だってこんなに素敵なお花に囲まれたら、きつと幸せな気持ちになるんじゃないかなって」

サーバル「それは、わからなくもないかな。眺めてるだけでも、ふわふわした気分になってくるから」

かばん「ただ、実際にやるわけにはいかないよね。咲いてるのをたくさんちぎってこなきゃだし」

サーバル「あはは……」

かばん「……あ、サーバルちゃん。あれ見て」

サーバル「あれって周りの木と同じ、だよな。同じ色のお花咲いてるし」

サーバル「だけど、あの木だけすごくおつきいねー……」

かばん「どのくらいあるんだろうね……」

サーバル「さばんなにあった木より大きいかも……」

かばん「ねえ、あの木の下で休憩していいよ」

サーバル「ちよつと疲れたし、そうしよつか」

かばん「ふうっ……」

サーバル「綺麗だねー……」

かばん「そうだねえ……」

サーバル「でも、何でこんな綺麗な色してるのかな」

かばん「うーん……」

かばん「……あつ」

サーバル「何かわかったの？」

かばん「……このお花、ピンク色でしょ？ピンク色って赤と白が混ざるとできるんだけど」

かばん「砂漠の、ツチノコさんがいたところに赤いセルリアンがいたよね？」

サーバル「い、いたけど……」

かばん「……さつきこの場所を聞いたときに教えてもらった話なんだけどね、実は」

かばん「昔、この辺りに大きな赤いセルリアンが出たんだって」
かばん「そのときはみんな協力してやっつけたから被害は出なかったんだ」

かばん「でも、倒したときに欠片がこの辺に弾け飛んだの……」
サーバル「か、かばんちゃん？何言ってるのかな……？」

かばん「今でもここに残ってる欠片とか、地面に染み込んだ何かをこの木は吸い上げて……」

かばん「白いはずの花がいつしかピンク色の花を咲かすようになったんだ……」

かばん「そして、満月の夜になると赤いセルリアンが……」

サーバル「に、にやーっ！ダメ、やめてっ！この話おしまいっ！」

かばん「……あははっ、ごめんね。嘘だよ、サーバルちゃん」

サーバル「……嘘？な、何だ、嘘かあ」

サーバル「もうっ。オオカミみたいなこと言うのやめてよ、怖いよーっ」

かばん「怖くてぶるぶるしてるサーバルちゃんが可愛かったから、っい」

サーバル「でも、かばんちゃんの話は嘘だとしてもこの色はどうやって出してるんだろうね」

かばん「お花をじっくり観察したことなんてあんまりないけど、見たことない色だよね」

サーバル「ほんとに最初は白かったのかな。それとも、これが普通なのかな」

かばん「今度図書館に行ったら調べてみよっか」

サーバル「……ボスが色のついた水あげてこの色にしてる、とか」

かばん「な、何かやだなあ。色のついた水って」

サーバル「自分で言っただけで、ちよつと気持ち悪いかも……」

かばん「……不思議なところだね。ここ」

サーバル「不思議？」

かばん「素敵で、綺麗で、だけど今にも消えちやいそうな気がして……」

かばん「……まるでボクとサーバルちゃん、2人だけの世界になっちゃったみたい」

サーバル「あ、う……」

かばん「サーバルちゃん？」

サーバル「……何でも、ないよ。ただ、かばんちゃんと2人なのが、嬉しくて」

かばん「えっ？」

サーバル「最近、忙しかったでしょ。セルリアンとか、みんなのお願いとか、いろいろあつて……」

サーバル「こんな風にかばんちゃんと2人でゆっくりする時間、なかったから……」

かばん「うん……」

サーバル「だからね、私たち2人だけの世界で、2人きりでいられて、とっても嬉しいんだ」

かばん「そっか……。ごめんね、気づいてあげられなくて」

サーバル「気にしないで。かばんちゃんが頼られて嬉しいっていうのも、嘘じゃないから」

かばん「……それでも、気にしちゃうよ。だって、サーバルちゃんはボクの大事な人だもん」

サーバル「みやつ!？」

かばん「サーバルちゃん、ボクを大事な人って言ってくれたでしょ。それと同じ」

かばん「ボクの大事な人を、サーバルちゃんを悲しい気持ちにさせたくないよ」

かばん「サーバルちゃんには、どんなときも笑っていてほしいな」

サーバル「……えへへっ。ありがとう、かばんちゃん」

かばん「わっ……。どうしたの、肩に頭乗せてきたりして」

サーバル「……私ね、かばんちゃんとこんな風に過ごしてみたかったの」

サーバル「かばんちゃんと2人きりで、かばんちゃんと2人だけの場所……」

かばん「それはさつきも言ってた、2人でゆつくりしたかったって……」

サーバル「……かばんちゃんと2人でゆつくりしたいっていうのは、本当」

サーバル「だけど、私が嬉しかったのはもっと大きな理由があるんだ……」

かばん「もっと大きな理由？」

サーバル「それをかばんちゃんに伝えようかって、ずっと迷ってたの……」

サーバル「でも、こうしてかばんちゃんと2人きりで過ごして、ちゃんと話そうって思ったんだ」

かばん「サーバル、ちゃん。その、大きな理由、教えてくれる？」

サーバル「……かばんちゃん。私、かばんちゃんのが好き」

かばん「……ありがとう。サーバルちゃん」

かばん「ボクも、サーバルちゃんのこと、好きだよ」

サーバル「違うの。私の好きと、かばんちゃんの好きは……」

かばん「違うないよ。同じだって、言っただじゃない」

サーバル「同じ……？じゃあ、かばんちゃんは……」

かばん「サーバルちゃんと一緒。ただひとつ違うのは、相手がサーバルちゃんってことだけ」

サーバル「……ほんと？ほんとにかばんちゃん、私のことっ」

かばん「うん。サーバルちゃんのこと、そういう意味で好き」

サーバル「そっか、そうなんだ……。私も、かばんちゃんも……」

かばん「……サーバルちゃん。手、握ってもいい？」

サーバル「う、い、いいよ。ちよつと意識しちやって恥ずかしいけど……」

かばん「ありがとう。じゃあ……」

サーバル「あ、あれ？いつもしてるのとはちよつと違うね」

かばん「こうして指を絡ませて握ると、特別なものになるって本に書いてあったんだ」

かばん「ボクたちは、その。もう友達じゃなくて、特別になったか

ら……」

サーバル「……何だか、手がすごくあつついね」

かばん「握った手の中に火があるみたい……」

サーバル「……好き。好きだよ、かばんちゃん」

かばん「ボクも。サーバルちゃんが、好き……」

サーバル「……ねえ、かばんちゃん」

かばん「なあに？」

サーバル「私たち、これからもずっと一緒だよ」

かばん「もちろん。ボクの隣は、サーバルちゃんだけの場所だから」

かばん「どんなことがあつたとしても、ずっと、ずっと一緒だよ」

サーバル「……このお花、次はいつ咲くのか私にはわからないけど」

サーバル「また、ここでおはなみをしようね。私と、かばんちゃん

の2人だけで」

かばん「うん。約束だよ」

next.

3. ずっと一緒

サーバル「かばんちゃん。ただいまーっ」

かばん「……」

サーバル「ごめんねー、待っててもらって。最近自分で走らなくて……」

かばん「……」

サーバル「思いつきり走り回れて楽しかった……?」

かばん「……」

サーバル「かばんちゃん? かばんちゃんってば!」

かばん「うえっ!? ……さ、サーバルちゃん。帰ってんだ」

サーバル「もう。全然返事してくれないんだもん」

かばん「ご、ごめんね。つい夢中になっちゃって……」

サーバル「そんなに夢中になって、何をしてたの?」

かばん「えっと、これを読んだんだ」

サーバル「これって、本だね。図書館にいっぱいある……」

かばん「うん。図書館に行ったとき、いくつか貸してもらって」

サーバル「へえー」

かばん「サーバルちゃんも見てみる?」

サーバル「……うーん。やっぱり私には何なのかさっぱりだよー」

サーバル「せめて絵があれば少しはわかるかもしれないけど……」

かばん「そういう本もあるから、あとで一緒に見ようね」

サーバル「ほんと? 楽しみだなあ」

サーバル「でも、かばんちゃんはすごいなー。こんなにたくさん文字がわかるんだから」

かばん「そ、そうかな」

サーバル「そうだよー。私には変な形の模様には見えないうもん」

かばん「ちよっと恥ずかしいけど、でもサーバルちゃんに褒めても

らったのは嬉しいな」

サーバル「ねえ、このたくさんさんの文字にはどういう意味があるの？」

かばん「これは誰かが書いた作り物の物語だね」

サーバル「作り物の、物語？」

かばん「そうだなあ……。例えばボクとサーバルちゃんの冒険みたいな本当にあったことじゃなくて」

かばん「もしも図書館に向かわずにサバンナで暮らしたら、を想像して書いたって感じかな」

サーバル「かばんちゃんと一緒にさばんまで、かあ。何だか考えられないよ」

サーバル「それに私はへっちゃらだけど、かばんちゃんにはあの暑さは大変なんじゃない？」

かばん「あはは……。涼しくなるまで日陰でじっとしてるかもね」

かばん「それにボクはどこかに住むのなら、湖畔や図書館の辺りが過ごしやすくていいなあ」

サーバル「あの辺りは私も過ごしやすかったな。思いつきり走り回れるし」

かばん「と、そんな感じの誰かが考えたお話が書いてある本なんだ」

サーバル「ううー、何だかすっごくおもしろそう……。でも私はさっぱりだし……」

かばん「大丈夫だよ。ほら、これならわかるでしょ？」

サーバル「絵がついてる……。もしかして、さっき言ってた？」

かばん「うん、絵がついてる本。どうかかな？」

サーバル「これなら私にもわかるかも。あ、でもちよつとだけけど文字もあるんだ……」

かばん「そこはボクが読んであげるから。ほら、一緒に見よう？」

サーバル「わーいっ」

かばん（……とは言ったけど、ボクもこれ読んでないからどうい

内容なのかわからないんだよね)

かぼん(それにサーバルちゃんがものすごく近くて、何だか気になっちゃう……)

サーバル「かぼんちゃん?」

かぼん「あつ、ううん、何でもないよ。じゃあ始めるね」

サーバル「よろしくねっ」

『ここはジャパリパーク。ヒトとフレンズが仲良く暮らす大きな施設』

サーバル「ジャパリパークって、このことだよ。それを本にしたのかな」

かぼん「そうみたいだね。ヒトとフレンズさんが一緒に暮らしてるのかあ」

サーバル「ほら、早く続きっ」

かぼん「う、うん。えと……」

『大勢のヒトとフレンズが暮らすこの場所で、彼女はあの子に出会った』

『これは1人の少女とフレンズの、恋のものが』

かぼん「えええっ!!」

サーバル「わあっ!!き、急に何!」

かぼん「だ、だって、だってこれっ!」

サーバル「この本?この本がどうしたの?」

かぼん「それは、その、えっと……」

かぼん「……さ、サーバルちゃん。恋とか、恋愛ってわかる?」

サーバル「なんとなくはわかるかな。誰かのことが特別好きってことだよな?」

かぼん「それはそうなんだけど……」

サーバル「……あ。もしかしてこれってそういう本なの?」

かぼん「う、うん」

サーバル「そ、そっかあ……」

かぼん「……」

サーバル「……」

かばん「……べ、別のにしよつか。他にもいくつかあるから」
サーバル「かばんちゃん。これ、続き読んでほしいな」

かばん「えっ……」

サーバル「ダメ……?」

かばん「だ、ダメじゃないけど……」

サーバル「かばんちゃんと一緒なのは恥ずかしいっていうか、照れちゃうけど」

サーバル「私は、これが気になるな」

かばん「そう、なんだ……。じゃあ、続きから読むね……」

かばん（うう……。ただでさえサーバルちゃんが近くて気になってるのに）

かばん（一緒に恋愛のお話を読むなんて、すっごく恥ずかしい……）

かばん（何より、これ女の子同士で、余計にサーバルちゃんを意識して、ドキドキしちゃう……）

サーバル「この女の子、フレンズの子のことがとっても好きなんだね」

かばん「そ、そうだね……」

かばん（本の内容が恋愛だから、それに影響されてるだけ……。そのはず、なのに）

かばん（ボクにはフレンズさんを想う女の子の気持ちが痛いくらいにわかってしまって……）

サーバル「あれ。ねえ、手を繋いでるけどこれって普通じゃないよね?」

かばん「これ、は……。すっごく仲良くなったらするやつで……」

サーバル「へえー。じゃあ、あとで私たちもやってみようよ」

サーバル「私たちだって、すっごく仲良しなんだから」

かばん「あ、う、うん……」

かばん（サーバルちゃんのこと好きだけど、そういう意味ってわけじゃ……）

かばん（さつきまではそう思ってたのに、今は絶対そうだと言えな

くて……)

サーバル「わあ……。この子たち、抱き合ってる……」

サーバル「……えへへ、何か照れちゃうね。かばんちゃんと一緒にこの2人を覗いてるみたいで」

かばん「あ、あはは……」

サーバル「……もうすぐで終わり、かな。めくってる方があとちよつとになってるし、お話も素敵な感じだし」

サーバル「ワクワク、じゃない。ちよつとドキドキしちゃう……」

かばん「あ……」

かばん(今のサーバルちゃん、すごく、すつごく……)

かばん(どう言ったらいいんだろう……。可愛いとか綺麗ってだけじゃなくて、それが全部混ざったみたいな……)

サーバル「かばんちゃん。続き、読んで？」

かばん「……へっ?あ、えと……」

サーバル「……かばんちゃん?」

かばん(……無理、これ以上は無理!サーバルちゃんの前でこんな読めないよお!)

サーバル「だ、大丈夫?顔、真っ赤だよ?」

かばん「だいじょつ……!」

サーバル「ええつ?!ほ、ほんとにどうしたの、本に顔押しつけて」

かばん(ダメだ……。サーバルちゃんの顔、まともに見れない……!)

かばん(サーバルちゃんの顔見るだけであつつくなくて、すつごくドキドキして……)

かばん(やつぱり、ボク、サーバルちゃんのことを好きなんだ……。友達じゃなくて、恋の対象として……)

かばん(この女の子みたいに、ボクもサーバルちゃんが……)

かばん(……言うなら今しかない、よね。こんな機会、そうそうないだろうし)

かばん(ボクの気持ちを、サーバルちゃんにつ……!)

サーバル「あれ……?かばんちゃん、何で閉じちゃうの?」

かばん「……サーバルちゃん。サーバルちゃんはボクのこと、どう思ってる？」

サーバル「どうって、友達だよ。とっっても素敵で、仲良しで……」

サーバル「最高の友達だって、私はそう思ってるよ」

かばん「……うん、そっか」

サーバル「かばんちゃん……？」

かばん「ボクもサーバルちゃんのこと、仲良しの友達だって、そう思ってる。そう思ってた……」

サーバル「思ってた？」

かばん「……一緒に本を読んで、気づいたんだ。ボクと、この本の女の子は同じなんだって」

サーバル「ええと……？かばんちゃんは何が言いたいの……？」

かばん「……サーバルちゃん。ボクは、サーバルちゃんのことを、好き」

かばん「友達としてじゃなくて、この本の女の子とフレンズさんみたいな恋愛の対象として……」

サーバル「……えっ？」

かばん「ボクは、ボクはサーバルちゃんに……」

かばん「……恋を、しちゃったんだ」

サーバル「えっ……？え、えと、そう、なの……」

かばん「うん……」

サーバル「へ、へえー……」

かばん（ああ、何だかあんまりよくない返事……。やっぱり、ダメだったかな……）

かばん（それに勢いで言っちゃったけど、もしこれで嫌われたりしたらボクはひとりぼっちに……）

サーバル「……かばんちゃんは私と、その本の2人みたいになりた
いんだよな？」

かばん「そう、だよ……」

サーバル「私ね、恋とか恋愛ってよくわかんないんだ。その、恋をして、恋をされてそのあとどうなるのかって」

サーバル「だけど、本の2人はとっても仲良しで、嬉しそうで、楽しそうで、それが少し羨ましくて……」

サーバル「本を見ているうちに、かばんちゃんとこの2人みたいになりたいって思ったの」

サーバル「かばんちゃんと一緒にいて、お話をして、触って、ドキドキしたい。物語の2人がしたこと全部、かばんちゃんとやってみたい」

サーバル「だってかばんちゃんは、たった1人の特別な人だから……」

かばん「サーバルちゃんっ……」

サーバル「かばんちゃん、私のことを好きになって、好きって言ってくれてありがとう。私、とつても、とつても嬉しいよ」

サーバル「私も、かばんちゃんが誰よりも大好きっ！」

かばん「じゃあっ……!!」

サーバル「うん！私、かばんちゃんの……」

サーバル「……ええと、どう言えばいいのかな？恋をした同士は友達じゃないと思うし」

サーバル「とにかく、私はかばんちゃんと本の2人みたいな関係になりたいな」

かばん「……ほ、本当に？」

サーバル「もちろんだよ。どうして？」

かばん「その、ボクが好きって言ったあと、何だか気のない返事をしてたから……」

かばん「もうダメだって、嫌われたって思っちゃった……」

サーバル「わ、私はそんなつもりじゃなかったんだよ。ごめんね、怖い思いさせちゃって」

サーバル「心配しなくても、私はかばんちゃんが大好きだから。大丈夫だよ」

かばん「……あの、ね。ボクたちや本の2人みたいな関係を恋人って言っただって」

サーバル「こいびと？」

かばん「うん。恋人」

サーバル「こいびと、かあ……」

サーバル「……何でかな。ちよつと恥ずかしいけど、でもそう言われて嬉しいんだ」

かばん「ボクもサーバルちゃんと、その、こ、恋人になれて……」

かばん「……とっても、嬉しいな」

サーバル「えつと、これで私たちはこいびとになったんだよね？」

かばん「ボクはそのつもり、だけど……」

サーバル「……えへへ。かばんちゃんとこいびとになれたんだって思うと、ね」

サーバル「たくさん嬉しいと楽しいでいっぱい、私からこぼれちやいそうだよ」

かばん「……そう言ってもらえると、ボクも嬉しいな」

かばん「サーバルちゃん。ボクの恋人になってくれて、ありがとう」

サーバル「私も、こいびとにしてくれてありがとう。かばんちゃんのこいびとになれて、すっごく嬉しいよ」

かばん「……恋人になったら何をするのかとか、どうなるのか、ボクも全然わからない」

かばん「でも、まずはこうして手を繋ぐことから始めようか」

サーバル「これって、さっきの……」

かばん「こうしていれば、サーバルちゃんと一緒にいられるね」

サーバル「かばんちゃん……」

かばん「サーバルちゃん。ボクたち、どこに行っても、何があっても、ずっと一緒だよ」

サーバル「うんっ。ずっと、ずっと一緒にいようねっ」

next.

4. 嘘つき

アリツカゲラ「いらっしやいませ〜、ろっじアリツカにようこそ〜！」

わたしはフレンズのアリツカゲラ。

このちほーでぐうぜん見つけたろっじの管理をしています。

あ、「ろっじ」というのは博士たちによるとお泊りができる場所のことらしいです。

キタキツネ「……まんぞく」

ギンギツネ「とてもいいサービスだったわ。わたしたちも見習わなくちや。またくるわね」

アリツカゲラ「ありがとうございます〜（ペコリ）」

おかげさまで最近はお客さまの評判もよく、遠くのちほーから来てくれるフレンズの方も多くなってきました。

ろっじは広いので一人でみるのは大変ですけどとてもやりがいがあります。

アリツカゲラ「さてと。次のお客さまのためにお掃除しないと」

だけど同時にとある問題もあつて……

???? 「きやあああー!!」

アリツカゲラ「森の方から……もしかして!？」

〜夜の森〜

パンサーカメレオン「ひいひい〜（gkgkbrbr）」

シロサイ「なんですの誰ですの〜!!」

バサツバサツ

アリツカゲラ「あの〜、どうかしましたか？」

ヘラジカ「おのれえ、セルリアンか！わたしと勝負しろお！」
ブンブン

アリツカゲラ「わあっ、危ないですよお！わたしはただのアリツカゲラです、やめてくださいー！」

ヘラジカ「な、なに？それはすまない、てつきりさっきのくせ者かと……」

アリツカゲラ「くせ者？なにがあつたんですか？」

ヤマアラシ「わ、わたしたち合戦30回記念でろっじつてところに泊まりに来たんですう」

アリツカゲラ「わあ、わたしその管理人なんです。ありがとうございます〜！」

オオアルマジロ「よよよ、そしたら森から黒い何か飛び出して『がおーっ』って……」

シロサイ「すっごくこわかったですの〜！」

ハシビロコウ「……（コクコク）」

アリツカゲラ「やっぱりまたそうだったんですねえ」

カメレオン「ま、また？でござるか？」

アリツカゲラ「ちかごろこの辺りでみなさんと同じようなことがよくあるんですよ〜」

ヘラジカ「なんと！やはりセルリアンが!？」

アリツカゲラ「ろっじを聞く前、ハンターの方に見てもらったところこのちほーにセルリアンはほとんどいないそうなんですが〜」

アリツカゲラ「しかしせつかく来ていただいたのにお騒がせして申し訳ないです……念のため周囲を見て回りますので」

ヘラジカ「では我々も共に行こう！」

オオアルマジロ「ええ!？」

ヤマアラシ「ヘラジカさま、わたしは怖くてムリですう〜！」

アリツカゲラ「わたしならこの辺りはよく知ってるので大丈夫ですから〜」

ヘラジカ「むむ、しかたない。我々は先にろっじに向かうとしよう」

ハシビロコウ「気をつけてね……」

アリツカゲラ「ありがとうございます。ろっじはこの道をまっすぐ行けばつきますよ」

くく森の奥くく

アリツカゲラ「ううくん、とはいえもし本当にセルリアンならどうしよう……戦うのは苦手だし」

アリツカゲラ「あつそうだ！動物だった時にしていた自分を強く見せる方法、あれをやってみようかなあ」

ガサツガサガサ！

アリツカゲラ「誰ですかあ!!」

ガサツ

????? 「うー！がおーっ!!」

アリツカゲラ「!!」

バサアツ！

????? 「!!? うわああつ、おおきいい！（ドテツ）」

アリツカゲラ「う、うまくいきましたあ。急に羽を広げて威嚇するなんて久しぶり……あれ？」

タイリクオオカミ「う、ううくん……」

アリツカゲラ「フレンズさん、ですか？」

タイリクオオカミ「うっ！し、しまった……まさかこちらがおどろかされるなんて……」

くくくくく

アリツカゲラ「それじゃあ、あなたがこの付近でフレンズをおどろかせていた犯人さんですか」

タイリクオオカミ「まあ、そういうことになるかな」

アリツカゲラ「堂々としてますね。セルリアンかと思いましたよ

」

タイリクオオカミ「ハハハツ。セルリアンがしゃべるわけないじゃないか。いや待てよ、しゃべるセルリアン……アリだな」

アリツカゲラ「あのお。じゃあなんでみなさんをおどかしたんですか？こんな夜中に」

タイリクオオカミ「わたしが夜行性だし暗い方が恐ろしいだろう？きみも鳥だからてつきり夜目が利かず怖がると思ったんだが」

アリツカゲラ「鳥目といってもほとんどの鳥はそこまで見えないわけじゃないですよ」

タイリクオオカミ「なるほど。使えそうなネタだ、覚えておくよ」
アリツカゲラ「じゃなくて、どうしてこんなことを？」

タイリクオオカミ「ふふふ、それはね……これを見たまえ！」

アリツカゲラ「？これは紙？絵ですか？」

タイリクオオカミ「少しちがうね。これはマンガといってお話になってるんだ」

アリツカゲラ「へえ、確かによく見るとなんだか物語になっててすごいですね！」

タイリクオオカミ「おもしろいだろう？わたしはこれを描く作家というものになろうと思うんだ」

アリツカゲラ「なるほど。でもそれがどうしてビックリさせることに？」

タイリクオオカミ「わたしはホラーものを描きたいんだ！フレンズが恐ろしい目にあう話さ」

タイリクオオカミ「だけどフレンズは動物だった時とちがって本当の狩りなんかしないしみんな基本的に平和にくらしてる」

タイリクオオカミ「だからわたしはみんなをおどろかせてその顔をマンガの参考にさせてもらってるってわけ」

アリツカゲラ「それはいいですけどわたしのろっじのお客さんをお

どかすのはかわいそうですよ〜！」

タイリクオオカミ「ああ、きみがあのもろっじのフレンズだったのか。あれがオーブンしてから色んな子が来て執筆がはかどったよ」

アリツカゲラ「そんなあ〜！」

タイリクオオカミ「……まあ今回はきみにつかまっちゃったし次からは少しひかえるよ」

アリツカゲラ「うう〜、やめる気はないんですか〜？」

タイリクオオカミ「これが中々たのしくてね。まあケガはさせないと誓おう……またな！」

バツ

アリツカゲラ「あつ！……もういなくなっちゃいました。すごい速さ……」

オオカミさんの言うとおり、それからろっじのお客さんが怖がることは減りました。

でもやっぱり時々そんな目にあうフレンズさんはいるようで……

わたしはお客さんはもちろん、オオカミさんがなんだか心配で森を見回ることが多くなりました。

そんなある日……

〜空〜

アリツカゲラ「はあ〜、今日もオオカミさんいないなあ。もう一度お話したかったんだけど……」

?????? 「きや、ガアーーーーー!!ガアーーーーー!!!ガアーーーーー!!!」

?????? 「うわああああつ!!」

……ドーンツ

アリツカゲラ「なっ、なんですか今の音は!?!というか、二つ目の叫び声は……オオカミさん!?!」

くく森くく

バサツバサツ

アリツカゲラ「あ、あれは……」

トキ「けほっけほっ、び、ビックリした……あら?アナタは?」

アリツカゲラ「アリツカゲラです。あのく、なにがあつたんですか?」

トキ「わたしはトキ。仲間を探してこのちほーに来てみたの。そしてたら急に茂みから何かが出てきて」

トキ「……あまりにおどろいたから威嚇の鳴き声を出しちゃつたの。ごめんなさい、うるさくて」

アリツカゲラ「いえそれはいいんですけど……さっきの一つ目の声はトキさんだったんですね」

トキ「ええ。急に出てきたのは大声をあげながら森の中に走っていったわ。そのあと何かぶつかった音がしたけど」

アリツカゲラ「やつぱり……!それきつとオオカミさんです、探さないと!」

バサツ!

トキ「あつ、行っちゃつた……なんだつたのかしら」

くく森の奥くく

タイリクオオカミ「う、うう…… (フラフラ)」

アリツカゲラ「……いきました、オオカミさん！」

タイリクオオカミ「や、やあ……また、会ったね……」

バタツ

アリツカゲラ「あつ！大丈夫ですか！どうしてこんな……」

タイリクオオカミ「また……見慣れない子が来たからおどろかそう
と思っただけだね……さっきの声、聞いただろ？」

アリツカゲラ「ええ、なんだかすごい声でしたけど……」

タイリクオオカミ「わたしは耳が良くてね……どうも、彼女の声
はひどいダメージになったらしい」

タイリクオオカミ「あんまりびっくりしたもんだからあわてて逃げ
だしたら岩に思い切りぶつかって、このザマさ。もう走れない……」

アリツカゲラ「そ、そんな……！」

タイリクオオカミ「まあこれまでたくさんのフレンズをおどろかせ
た罰が当たったのかもね……しかたないさ……ってきみ!？」

グイツ

バサツバサツ

アリツカゲラ「しっかりしてください！すぐろっじに運びますか
ら、そうしたらきつとだいじょうぶです！」

タイリクオオカミ「おどろいた……あんがい力持ちなんだなきみは
……キツツキはあんなに小さい鳥だったのに」

アリツカゲラ「アリツカゲラです、よお！うーん！こんなの今回だ
けですからね！」

タイリクオオカミ「そうだった……ありがとう、アリツさん……」

アリツカゲラ「オオカミさん……?」

タイリクオオカミ「わたしみたいなのを気にかけてくれて……それ
に最後にこんな空の旅ができるなんて……」

アリツカゲラ「！ 最後だなんて、そんな、ちよつとぶつかったく

らいじゃないですか！弱気になっちゃ……」

タイリクオオカミ「そうだな……どうせ最後なら……きみのおどろく顔が……みたかつ……た……」

アリツカゲラ「え……」

タイリクオオカミ「……」

アリツカゲラ「そ、そんな、ウソですよね？」

タイリクオオカミ「……」

アリツカゲラ「あんな、むだに元気でみんなをおどろかせてたオオカミさんが、そんな、死んじやう……なんて……」

アリツカゲラ「オオカミさあーん!!返事をしてくださいよお！」

タイリクオオカミ「うん、なんだい？」

アリツカゲラ「……へっ……?」

タイリクオオカミ「いやあ空を飛ぶのは最高だね。あまりに気持ちよくて返事を忘れたよ」

タイリクオオカミ「それにしてもむだに元気とはひどいんじやn」

ポロツ

タイリクオオカミ「あ」

アリツカゲラ「あ」

ひゅらうー

タイリクオオカミ「うわああああああ!!」

アリツカゲラ「オオカミさあーん!!」

くろつじく

アリツカゲラ「まったくひどいですよお！」

タイリクオオカミ「いやあ、ごめんごめん」

アリツカゲラ「いいえ、ゆるしません！あんなウソまでついて！本当におどろいたんですから！」

タイリクオオカミ「でもウソはついてないよ。ほら、ぶつかった時に足をくじいたから走るのはしばらくムリだ」

タイリクオオカミ「トキの声で平衡感覚も変になってたし。空を飛ばせてもらうのも一生に一度だろうしね」

タイリクオオカミ「どうせ最後ならアリツさんのおどろいた顔を見たいと思ったのも、本心さ」

アリツカゲラ「むむむ……」

タイリクオオカミ「ははっ、いい顔いただきました！あっ、いてて……」

トキ「ごめんなさい、わたしのせいで」

アリツカゲラ「トキさんがあやまる必要はありませんよ！オオカミさんの自業自得なんですから！」

トキ「そう？ならせめてお詫びに歌を歌おうかしら」

タイリクオオカミ「びくっ！い、いやそれは遠慮するよ！」

アリツカゲラ「とにかく、オオカミさんはケガが治るまでここにいてもらいますから！もう無茶しちやいけませんよ？」

タイリクオオカミ「うっ、それじゃ誰もおどろかせられないじゃないかないか……」

アリツカゲラ「そんなことしないでいいですからっ！」

トキ「あら、誰かをおどろかすなんて簡単じゃない？わたしなんて歌を歌うだけでみんなびくくりするみたいだし」

タイリクオオカミ「それはきみだけ……いや待てよ。確かに直接おどかさなくたっていいわけだ……」

アリツカゲラ「……またなにか考えてますっ？」

くくしばらくしてくく

タイリクオオカミ「……というわけで、パークは本当はセルリアンの女王が支配されていて……」

ギンギツネ「こわいこわいー!」

キタキツネ「ゲームの話みたい……もつと聞きたい……」

タイリクオオカミ「いい顔いただきました。そっちの子はけっこう強いね。じゃあ今度は……」

アリツカゲラ「オオカミさん、またそんな怖いウソばかりついてくく」

タイリクオオカミ「いいや、わたしは全部うわさを話してるだけさ」

アリツカゲラ「そのうわさの出どころはオオカミさんじゃないんですか?」

タイリクオオカミ「さあどうかな? まあ記憶まちがいくらいは誰にでもあるからね。そうだ、ある歴史的なマンガ家の名言にこんなのが……」

アリツカゲラ「もう消灯時間ですよ。みなさんまた今度にしましょう」

ギンギツネ「はい。ほら、キタキツネ行くわよ」

アリツカゲラ「ほらウソつきオオカミさんも。一日13時間は寝るんでしょう?」

タイリクオオカミ「夜行性だからへいきだけどね。しかしウソつき扱いは心外だなあ」

アリツカゲラ「いいえ、ウソつきですよ」

アリツカゲラ「だって、わたしはいつだって二人で空を飛んでもかまいませんから」

タイリクオオカミ「え？それって……あ、ちよつと待って！」

タイリクオオカミ「ねえ今また空を飛ばせてくれるって言った？」

アリツカゲラ「さあ、オオカミさんの聞き間違いでは？」

タイリクオオカミ「いやわたしは耳がいいんだそんなはずはないよ」

アリツカゲラ「うーん、オオカミさんがたのむならいいかもですけど」

タイリクオオカミ「ほんとに!？」

アリツカゲラ「でもそれだとオオカミさんはやっぱりウソつきになりませんか？」

タイリクオオカミ「あつ、い、いや最初にウソをついたのはアリツさんだから……」

アリツカゲラ「あはは、オオカミさんなんだか子どもみたいですよ」

タイリクオオカミ「うう……とにかくだね……」

next.

5. レズ

……

―ビーバーとプレーリーの家

コンコン

アライグマ「こんにちはなのだ！」

フェネック「こんにちはだよー」

ガチャツ

プレーリー「やや、お客さんでありますか！」

アライグマ「そうなのだ！ アライさんなのだ！ 実は聞きたいことがあつ」

プレーリー「では早速ごあいさつを！」ガシツ

アライグマ「へっ？」

チューーーーーッ

アライグマ「?!?!?!?!?!」

プレーリー「ん！」チュツチュパツヌプツ

アライグマ「んっ?! んんうう?! んんーーーーっ?!?!?!」

プレーリー「ぷはあ」

フェネック「……おおー」

アライグマ「な、な、……なにをするのだあーっ！」

プレーリー「これがプレーリー式のごあいさつなのであります！」

フェネック「なるほどねえー」

アライグマ「い、いきなり、びっくりしたのだ……」

フェネック「おやおやアライさん。顔が赤くなってるかい？」

アライグマ「な、なってるによだ！」

フェネツク 「かみかみだねーアライさん」
プレーリー 「そちらの方もごあいさつを！」 ガシツ
フェネツク 「フェネツクだよー、よろし」

チューーーーーッ

プレーリー 「んー」 チュツチュパ

フェネツク 「……」

フェネツク 「ん」 チュルチュパヌツヌポツ

プレーリー 「んんんっ!?!?」

アライグマ 「?!」

プレーリー 「あへっ……」 フラツ

フェネツク 「ふうー」

アライグマ 「ふえ、フェネツク……?」

フェネツク 「んー? どうしたんだい? アライさーん」

アライグマ 「な……なにをしてるのだ……」

フェネツク 「あいさつを返しただけじゃないかー。ひかないでおくれよー」

アライグマ 「……いや、どん引きなのだ……」

フェネツク 「ひどいなー」

フェネツク 「じゃあ」

フェネツク 「?!?!」 アライさんも、ちゅーしようかー。私と」

アライグマ 「?!?!」

アライグマ 「ねえあなたにえを言っへるのだあ!!!」

フェネツク 「ただのあいさつだよー」

アライグマ 「ひっ!? や、やめ、やめるのだ! やめっ」

ガシツ

チュチュユウー………

………

アライグマ「あひ………あ………」ポー………

フェネック「アライさーん。大丈夫？」

アライグマ「ビクッ」

フェネック「アライさーん？」

アライグマ「………ひ、ひどい………ひどいのだ……。なんでこんな、う、ぐすつ、こんなことを………」

フェネック「………」

フェネック「だってアライさん。プレーリードッグとちゅーしちやつたじゃないかー」

アライグマ「それはっ、アライさんのいしじゃないのだ!! 無理矢理に………だいたい、そんなことなんの関係がっ」

フェネック「私はずーっと、我慢してたのにさー」

アライグマ「へ………?」

フェネック「ずるいよねー。いきなり、あいさつだーなんて言っ………さあ」

アライグマ「ふえ………フェネック………? なんか、目がこわいのだ………」

フェネック「ねえ、………アライさーん」

アライグマ「ひ、ひいい! ご、ごめん! ごめんなさいなのだあ!! なにがわるいのか分からないけどフェネックをおこらせたなら謝るのだあ!! ゆるしてほしいのだあ!!」

フェネック「………」

アライグマ「………う、………フェネック………?」

ナデリ

フェネック「よし、よし」ナデナデ

アライグマ「あ、あの」

フェネック「だーいじょうぶだよー。おこつてなんかないから

ねー」ナデナデ

アライグマ「ほんとに……?」

フェネック「ほんとだよー」

アライグマ「よかったのだ……」

フェネック「こっちこそわるかったよ。こわがらせてごめーん
ねー」

アライグマ「べ、べつにこわがってなんて」

フェネック「仲直りに、お互い洗いつこしようかー」

アライグマ「洗いつこ!? アライさん、洗うの大好きなのだ!!」

フェネックのこといっばいきれいにしてやるのだ!」

フェネック「ふふー、よろしくたのむよー」

ビーバー「大丈夫ツスカ!? しっかりするツスよ!!」

プレーリー「うう……やばいやつに手を出してしまったであります

……」

ビーバー「もう、だれかれ構わずちゅーするの、やめたほうがいいッ
スよ?」

プレーリー「しかし、これが習性なので……」

ビーバー「……いつでも」

ビーバー「いつでもオレっちが、ちゅーさせてあげるツスから……」

プレーリー「ほ、ほんとうでありますか!?!」

ビーバー「っていうか今でもおはようとおやすみのたびにちゅーさ
れ」

プレーリー「んーっ」チューーツ
ビーバー「んんうっ!？」

プレーリー「それだけじゃ足りないであります! もっともつと、顔を見合わすたびにしまししょう!」

ビーバー「うー……もう、しよーがないツスねえ……」

プレーリー「えへへ……」

……

—温泉

アライグマ「やめっひああ!? そこはっだえっだめなのだあ!!」
フエネツク「ほーらアライさん、こつちもきれいにするよー?」ワ
シヤワシヤワシヤ

アライグマ「ひぐううっ!!? しよこもらめなのだああつあつあつ
!!」

ギンギツネ「あの……ここ、そーいう場所じゃないんですけど」
キタキツネ「ギンギツネ……あれ、なにやってるか分かるの……?」

ギンギツネ「えっ!? そ、そつれは……」

キタキツネ「………ギンギツネ、えっちだ」

ギンギツネ「なっ……!? はあ!？」

キタキツネ「ボクらも洗いつこ、する?」

ギンギツネ「し な い!!」

キタキツネ「ちえっ」

アライグマ「はあっ、ひいつ……たすけてえ、かばんさーん!」
フエネツク「おやあ……アライさん。私と洗いつこしてるときに、
他の子の名前を出すなんて……」

アライグマ「へっ……? あれ? フエネツク……? なんかまた

目がこわ」

アツーーーーーッ
!!!!!!

豆知識

フェネックはキスを交わしながら交尾をするといわれています

そのキスの長さはなんと2時間以上とも言われています

因みに発情した雌のフェネックは異常に甘えん坊になるともいわれています

ペットとして飼ってても、いつか発情する場合もあるので
飼い主の皆さん、覚えて下さいね。

end.